

ルソーの夢

——むすんでひらいて考——(その十七)

海老沢 敏

十一、日本人の歌として(承前)

伊沢修二が〈示明〉している实例は、《樺》、《胡蝶》、《鼠》の三曲の唱歌である。〈樺ヤ樺、樺ノ花カ開イタ〉、〈蝶々蝶々、菜ノ葉ニ止レ〉、〈矢ヲ取ロ矢ヲ取ロ大矢ヲ取ロヨ〉といった歌詞で始められる三曲中、とりわけ名高いのは第二曲《胡蝶》である。この曲は後年《小学唱歌集 初編》の第十七曲として、小学唱歌としても位置づけられるからである。遠藤宏著の《明治音楽史考》の第四編〈唱歌篇〉第四章〈歌曲の戸籍〉には「日本(この歌が入って来たのは実に早く、《ボートの歌》The boat song

“Lightly row! Lightly row! o'er the glassy waves we go”¹⁾とあって、明治七年伊澤修二先生が愛知県師範学校長であった時、教師野村秋足に作詞させ、小学校で歌はせたと先生の思出の記(同聲会雑誌)に見える。^(注5)

(注5) 同書二〇八ページ—二〇九ページ。

伊沢修二が愛知師範学校長に任命され、その仕事を遂行しながら、一方ではその「師範学校の付属機関として幼稚園風のもの^(注6)を設け」て、ここで唱歌や遊戯を教えることをはじめたことから、この《胡蝶》などの《遊戯歌》が生み出されたものであったが、そのような発想を導いたものはいったいなんであったろうか。伊沢修二に関するいくつかの文献には、次のような記述が見出され

るのである。「先生は〔中略〕工部省に出仕したとは云へ、教育の方にも充分心残りがあつた。加之中学幹事在動中に、文部省お雇教師フルベッキが贈つて呉れた、ゼ・チャイルドといふ書物は、最も先生の興感を惹いたのである。」^(注7)「たまたま雪投げ事件が紛糾して謹慎中の伊沢のもとへ、南校時代の教師フルベッキから、『児童論』という本が贈られてきたので、これに目を通していた。フリーベル Froebel 流の幼稚園に関する内容の本であつたというが、伊沢は以来ひそかに西洋の教育思想にも興味を寄せようになつていた。」^(注8)

(注6) 上沼八郎著、上掲書五二ページ。

(注7) 故伊澤先生記念事業会編纂委員編纂《築石伊澤修二先生》〈故伊澤先生記念事業会発行〉二四ページ。

(注8) 上沼八郎著、同右書四八ページ。

《ゼ・チャイルド》あるいは《児童論》とはいつたい誰れの著書であろうか。上沼氏の記述からヘフリーベル流の幼稚園に関する内容の本と推察されるが、伊沢自身の証言〈今吾輩西洋ニ於テ著名ナル教育士フリーベル氏其他ノ論説ニ從ヒ〉からも、この著書はおそらくマティルダ・H・クリーゲ著《児童——その本性と諸関連^(注9)》と考えられる。この書は副題からもヘフリーベルの教育原理の説明であり、かつヘマールンホルツ・ビュローウ男爵

夫人のドイツ語〔著書〕からの自由な翻譯であることが知られる。事実、クリーゲによる序文を読み進めると、この本がマールンホルツ・ビュローウ夫人の著書《児童——その本質^(注9)》の自由な翻譯と説明されているのである。

(注9) 《The Child, Its Nature and Relations; An Enoctiation

of Froebel's Principles of Education. By Mathilde H. Krieger.

A Free Rendering of the German of the Baroness Mathen-

holz-Bilow. 2nd Edition. New York: E. Steiger, 1872》

ここで、このマールンホルツ・ビュローウ夫人およびクリーゲ夫人のフリーベル文献について、またその伊澤修二への影響関係については論じることが割愛せざるをえないがこの書の再版が刊行された一八七二年（明治五年）には、すでに前章で紹介したアイドルフ・ドゥーアイの《キンダーガルテン》の第四版が、ニューヨークのE・シュタイガーなる同じ出版社から刊行されていることが注目されるのである。クリーゲの《児童——その本性と諸関連^(注9)》の第六章と第七章はヘフリーベルの《母の愛撫の歌》の説明に費やされ、フリーベルの教育思想の中で、母親が歌う単純な歌が子供たちの魂のもっとも偉大な教育者であると捉えられているとの指摘がおこなわれている。一方、ドゥーアイの《キンダーガルテン》には、《ルソーの夢》こそ収められてはいないが、《胡

蝶》の原曲が《雪合戦》の名で、音楽、歌の実例中、《心の練習》の第七曲として掲げられているのである。^(注10)

(注10) Adolf Douai 《The Kindergarten》 4th Edition, New York, 1872. 四五ページ。

伊沢がどこから《胡蝶》の原曲を抜き出してきたかは不明であるが、ここで重要なことは、明治七年（一八七四年）という時点で、彼がすでにフリーベルの《キンダーガルテン》の思想と運動とを知っていたことであろう。しかもそれがフリーベルの原典、すなわちドイツ語のオリジナルなものでなく、アメリカのキンダーガルテンのものであり、したがって、伊沢修二はイギリスやアメリカの《キンダーガルテンリーダー》のひとつとしての《ルソンの夢》をたとえじっさいにはこの時点で知っていなかったとしても、こうした《遊戯歌》、《唱歌遊戯》としての《ルソンの夢》の間近に近づいていたことだけは確実なのである。

伊沢修二は、すでに述べたように、デイヴィッド・マリーの推薦を受けて、アメリカに留学を果すことになるが、それは明治八年のことであった。これも前に触れたように最初の幼稚園の創立は翌明治九年であった。西暦一八七五年と七六年にあたるこの時期には、アメリカ、それもニュー・ヨークやボストンを中心として、キンダーガルテン関係の文献が次々と出版されており、《唱

歌遊戯》に深い関心を抱いていた伊沢修二は、そうした実践の本場である米国で直接こうした文献に触れることになるだろう。また、それと平行して、これらの文献類が陸統と日本へと輸入されてくるのである。現在国会図書館が所蔵するこの種の文献、すなわち、ドゥーアイ、ホリス・マン夫人とエリザベス・P・ビーボディの著書などは、《明治十年三月文部省交付》と捺印されている。これらの文献は、明治四年に設置された文部省が海外文献の網羅的な蒐集をも目指して設立した《教育博物館》のコレクションを形づくっていた。第十章で紹介したロンゲ夫妻の《英語キンダーガルテン実用案内書》の第十版（一八七七年）も、この《教育博物館》に所蔵されていたものである。

ところが、このロンゲ夫妻の著書は、明治十年前後によく幼稚園教育に力を注ぎはじめた文部省から翻行刊行が試みられているのである。それは桑田親五訳《幼稚園》^{（ままたこのその）}（全三巻）である。巻上が明治九年一月、巻中が明治十年七月、巻下が明治十一年六月に文部省から出されたこの《幼稚園》の《巻下》の二五ページから二六ページにかけては次のような歌が掲げられている。

第三 楽キ景色ノ歌

小キ兒童ノ相和スルヲ見ル其楽キ如何ゾヤ其苦辛トナルモノト
相互ニ之ヲ為サズ」嗚呼小キ兒童ノ相和スルヲ見ル其愛ッシキ

如何ゾヤ

彼等決シテ怒ヲ発セズ決シテ約束ヲ違_ズ決シテ薄情ノ色ヲ顯
サズ雙眉愛情ヲ帶フ○嗚呼小キ兒童ノ相和スルヲ見ル其愛_ラシ
キ如何ゾヤ

彼等心意ヲ同ウシ丁寧懇篤哀憐ノ情アリ好テ他人ヲ寬恕シ衆人
ノ幸ヲ為ス○嗚呼小キ兒童ノ相和スルヲ見ル其愛_ラシキ如何ゾ
ヤ彼等家ニ在リ學校ニ在リ遊戯ニ在ルモ愉快歡樂シテ常ニ人間
ノ快樂社会ノ平和ヲ増サントス○嗚呼小キ兒童ノ相和スルヲ見
ル其歎如何ゾヤ

彼等若シ互ニ相注意シ互ニ其勞ヲ負ハ、世間速ニ睦シキ一家ノ
如クナラン」嗚呼小キ兒童ノ相和スルヲ見ル其歎如何ゾヤ」

これこそロンゲ夫妻の《英語キンダーガルテン実用案内書》の
終章に収められた《準備の歌》の第二曲、すなわち《楽しい眺
め》^{アイト}の五節からなる歌詞にほかならない。すなわち《ルソーの
夢》の旋律につけられたテキストなのである。この《幼稚園》^{キョウエン}で
は譜例はつけられていない。しかしながらロンゲ夫妻のこの書物
からの翻訳紹介であることから、《キンダーガルテンリート》と
しての《ルソーの夢》が原書では明治九年以前に、そしてこう
した翻訳のかたちでは明治十一年六月に、日本に導入され、ある
いは紹介されたという事実が確認されるのだ。《ルソーの夢》、す

なわち《むすんでひらいて》の旋律は、こうして、小学唱歌《見
わたせば》として、《小学唱歌集初編》の第十三曲として、すな
わち唱歌教育の教材として、公式に公教育としての音楽教育の中
で位置づけられるに先立って、私たちの国日本において、《遊戯
歌》、《唱歌遊戯》導入の試みの中で、はやくもその姿を現わして
いるのである。

それでは《ルソーの夢》が、日本に紹介されたのは、この《キ
ンダーガルテンリート》としての《美しい眺め》、すなわち《楽
景色ノ歌》のかたちが最初なのであるうか。ここで私たちは
《ルソーの夢》の伝播普及のもうひとつのかたち、もうひとつの
ルートについて、もう一度振り返ってみる必要があるだろう。す
なわち《讚美歌》としての《ルソーの夢》、換言すれば《グリーン
ヴィル》と呼ばれた讚美歌の旋律としての《ルソーの夢》の系統
である。

十九世紀の英国において、《ルソーの夢》が讚美歌の節、旋律
として採用され、いくつかの讚美の歌詞にアダプトされてひろく
歌われていったこと、その過程で、ポピュラーな讚美歌の節とし
て、他の旋律と同様、都市の名前が冠せられ、《グリーンヴィル》
と通称されたこと、英国という領界を越えて、米国の他の国々
に伝えられていったことについてはすでにくわしく説明した。こ

うした讚美歌としての《ルソーの夢》、すなわち《グリーンヴィル》が、日本にも伝えられることになるのはむしろ当然のことである。プロテスタント讚美歌がわが国で初めて歌われたのは明治に入ってからではなく、十七世紀中葉に長崎港内の出島においてオランダ語によるカルヴァン派の詩篇歌であったといわれるが、それはさて置くとしても、いわゆる英語讚美歌が非公式ながら明治以前にはじまったプロテスタントの宣教活動（安政六年＝一八五九年）とともに移入されたことは容易に想像される。しかしながら、日本語によって歌われるプロテスタント讚美歌の最初の記録は明治五年（一八七二年）である。^(注11)

（注11） 《覆刻明治初期讚美歌》（新教出版社）解説所載、原恵
《日本の讚美歌史》（同解説七ページ）

日本語による讚美歌創造の努力が出版というかたちで実を結んだのは、明治六年（一八七三年）から翌明治七年（一八七四年）といわれている。最近新聞紙上で話題となった明治六年版の讚美歌集の問題は、本稿には直接の関係がないので、ここでの言及は差し控えたいが、明治七年には、合計七種の日本語讚美歌集が出版されたことから願^(注12)みて、この明治七年こそ、日本の讚美歌史上、最初のきわめて重要な記念すべき年であったというべきであろう。

（注12） これら八種の讚美歌集は神戸女学院図書館へオルチン文庫に所蔵されており、（注11）に挙げた《覆刻》《明治初期讚美歌》（新教出版社）ですべて翻刻されている。

これらの讚美歌集にはいずれも曲譜がついていない。そればかりでなく、曲名の指示もないものがほとんどである。その中でプロテスタント系の教会が日本で最初に刊行した讚美歌集《聖書之抄書》なる鉛活字本が目につく。^(注13)七種の讚美歌中唯一の鉛活字本であるとともに一五・〇×二一・一の小型で縦型のこの書は、ローマ字と日本語が並記してある点でも特徴があり、唯一の洋綴本でもあって、二四ページの第一部は十戒やニカイア信条、主の祈り、詩篇などが収められ、つづく五六ページに讚美歌二七曲が印刷されている。この讚美歌を伴う文献は、横浜のバプテスト派宣教師ネーサン・ブラウン（一八〇七—一八八六）が編集したもので、明治六年（一八七三年）に來日、同年三月に横浜第一浸社教会（現日本バプテスト同盟の日本バプテスト横浜教会）の設立に際して牧師に就任したこの人物は、米国北部バプテスト教会の日本伝道の礎を据えた存在と評価されている。^(注14)

（注13） 《Scripture Manual. SEICONO NUKIGAKI. 聖書之抄書 ぎりすの降世千八百七十四年 YOKOHAMA. Printed by Wm. P. Brown, 1874》ちなみに印刷者ウィリアム・P・

ブラウンはネーサンの息。

(注14) 《覆刻解題——明治初期讀美歌一二冊の内容とその特色——》(《明治初期讀美歌解説》七一ページ)。

この《聖之書抄書》の大きな特徴のひとつは、第二部に収められた二七曲の讚美歌の曲名を示している点であろう。同じ明治七年(注15)に刊行された他の六集の讚美歌集にみられないこの特徴によって、私たちはこの二七曲の第四曲に《Greenville》という本稿の中心となっている曲名を見出すことができるのだ。

「DAI GI (Greenville)」

第四 キミノ ミチビキ

アマエホワシユノシユヤ オホノベニサマヨフ

ワレタビバトトラバ ミチビキタスケヨ

アクマデテンノパンラ サヅケタマヘヨ

①

カハカヌイヅミラ イワヨリナガシ

晝クモヨル火ノ ハシララシメシ

カドヤキユカセヨ ワガフムミチニ

②

ハテントキヨルダンノ カハベニユキテ

オソレヌコミロラ ワレニコミイレ

カナンギシラブナンニ ワタラセタマヘ

《覆刻解題》はその《追記》で、ネーサン・ブラウンの書簡へ一八七四年十二月二(三一?)日はの記述によって、この《聖書之抄書》が従来一八七四年(明治七年)十一月に刊行されたとする通説がくずれ、早くても同年末、あるいは翌一八七五年初である可能性を示唆している。しかし、いずれにせよ、この《聖書之抄書》の存在によって、日本語讚美歌としての《グリーンヴィル》、すなわち《ルソーの夢》が、《遊戯歌》、あるいは《キングダーガルテンリート》としての登場に先立って、日本でその姿を示しはじめたことを、私たちは知ることができるのである。

《グリーンヴィル》は、さらに明治九年に東京で刊行された肉筆木版本の《改正讚美歌》にも収められている。《改正讚美歌》は日本基督一致教会系の讚美歌集であるが、ここでは《グリーンヴィル》は、第十八《あきみのきみなる》、第十九《あれのにまよえる》、および第三十五《耶穌きみのほかに》の三つの歌詞で歌われるのである。

第十八 8.7.4 Greenville

一あきみのきみなる エホバのかみよ

あれのにまよへる われたびとぞ

マナのごと天乃 かてをふらせよ

二かほかぬいづみの ながれをしたひ

たちつよくくもを はしらとたのみ

みちびくひかりと ともにゆかまし

三みなもろともにや ヨルダンのかはを

わたりておそれず ケオンのくにへと

ゆくべきみちをば われにをしへよ」

「第十九 8.7.4 Greenville」

一あれのにまよへる われをたすけよ

われはよわけれど エホバはつよし

あめの食かをもて われをやしなへ

二つきやぬいのちの みなもとひらき

くものみはしらや 火のはしらをバ

わがさきにたて われをみちびけ

三おそることなく ヨルダンのかはを

わたりてカナンにと つかしたたまへ

かぎりなくそこに エホバをあがめん」

「第三十五 8.7. Greenville」

一耶蘇イエスきみのほかに たすけはあらず

そのいつくしみも よにたぐひなし

われをたすくるもの あらざるるときに

イエスわれのために 十字架ちよじかに死しせり

二よにいませしとき わずらふものを

いやせしごとくに いまもなほたすく

イエスのめぐみをバ われハわすれじ

わがちよはわれを きよめたまへり」

さらに明治十年に長崎で刊行されたメソジスト教会系の《讚美

歌一》もその第三十八がこの《グリーンヴィル》である。アメリカ

カのメソジスト派宣教師ジョン・C・デイヴィスン（一八四三—

一九二八）は明治六年（一八七三年）に來日し、長崎を本拠とし

て伝道活動を展開した人である。この歌集の歌詞へみかみのちか

らハ、いとかがりなくは別のものである。明治十二年に刊行の

《組合教会讚美歌《さんびのうた》はW・W・カーティスの編で

五六曲の歌を収録しているが、その第三十三もおなじく《グリー

ンヴィル》の旋律によつて歌われ、歌詞は《改正讚美歌》の第十

八と同じ歌詞をとっている。こうして《グリーンヴィル》は、

《小学唱歌集 初編》の刊行に先立って、プロテスタント教会で

は、讚美歌のひとつとして重用されていくのであった。また、そ

のような事情は《見わたせば》としてこの旋律が別の姿で立ち現

われても変りなく、さらにもてはやされていくことになるのだ。

（つづく）（国立音楽大学）